

Collins COBUILD English Grammar

第3版に見る現代英語の文法の諸相

藤本 和子

1. 辞典や文法書は、実際の言語使用や言語変化を反映していく重要な役割をもつ。The Collins Birmingham University International Language Database (COBUILD) といえ、本格的にコーパスを活用した *Collins COBUILD English Language Dictionary* (1987年) の出版で広く知られている。この辞典の発行以来、英国を中心とする出版社が、競ってコーパスに基づく ESL/EFL 学習者用辞典を出版している。大規模コーパスの利用以前は、辞典や文法書の編纂は、主として編纂者の直観に頼るところが大きかったと言えよう。しかしながら、コーパスデータを使用することにより、英語の語彙や構造が、現在どのように使用されているかをより明確に映し出すことができる。2011年に出版された *Collins COBUILD English Grammar* 第3版(以下、*CCEG3*) は、the Collins corpusのデータに基づいた記述がなされている。同書には、‘The continued development of the corpus has enabled us to keep up with the ever-changing nature of language’ (p. x)と述べられているように、過去20年以上にわたって収集されたコーパスデータに基づく研究の成果が掲載されている。本稿では、*CCEG3*と2005年に出版された*CCEG*の第2版(以下、*CCEG2*)を比較、分析することにより、現代英語の文法がどのように使用されているか、またその変化について調査することを目的とする。

まず、両版が基づくコーパスデータを比較してみよう。*CCEG2*の編纂には、the

Collins Word Webの一部である、およそ5億2,400万語（編纂時）のthe Bank of English corpusが使用されている。CCEG3の編纂には、40億語（編纂時）のthe Collins corpus が用いられている。このコーパスには、ウェブサイト、新聞、雑誌、世界中で出版される書籍からの書き言葉と、ラジオ、テレビ、日常会話からの話し言葉のデータが収められている。モニターコーパスであるため、絶えず新たなデータが加えられている。

CCEG が初版から記述するのは、‘functional grammar’である。CCEG3 (p. viii) には、‘functional grammar’は、‘[a] grammar that puts together the patterns of the language and the things you can do with them’のように定義されるとともに、‘it [a functional grammar] is based on the important relation between structure and function’との説明が与えられている。CCEG3は、主に上級英語学習者と教員を対象としており、CCEG2と比較して、より一層、学習者に親切な編集の工夫がなされていることが分かる。まず、本文の説明中の表現や文法用語が、学習者によって、より理解されやすいものに変更されている点である。例えば、受動態における、‘the person or thing responsible for the action’のことを、CCEG2 (p. 404)では、‘the agent of the action’と呼んでいたが、CCEG3 (p. 406)では、‘the performer’ という表現に変更している。¹⁾ その他、注目すべきは、CCEG3では、学習者が理解しやすいように、the Collins corpusからの例文に手が加えられていることである。COBUILDに基づく出版物は、実際のコミュニケーションで使用されている用例を提示し、コーパスからの例文にほとんど手を加えないことで知られてきた。CCEG2にも、‘All the examples are taken from texts, usually with no editing at all’ (p. ix) (下線筆者)と記述されている。しかしながら、CCEG3では、‘Examples themselves remain close to the corpus, with minor changes made so that they are more accessible to the learner’ (p. ix) (下線筆者)とあるように、コーパスの用例を忠実に用いることには変わりはないが、CCEG2まで編集の中心者をつとめたJohn Sinclairに代わり、CCEG3では、Penny Handsが編集局長をつとめるようになり、編集方針に少し変化が見うけられる。²⁾ 例えば、以下の例文を比較してみよう。

- 1) *To every child adult approval means love, whereas disapproval means hate.* (CCEG2: 358)
- 2) *To every child, adult approval means love, whereas disapproval can cause strong feelings of rejection.* (CCEG3: 375)

CCEG2の1)の例文が、CCEG3の2)のように変更されている。つまり、コーパスからの用例に手が加えられていることがうかがえる。CCEG3の2)の用例で、*To every child*の後にコンマが入れられたことは、学習者や読み手の解釈を助けるであろう。CCEG2の1)の中の*means hate*の代わりに、CCEG3では、*can cause strong feelings of rejection*のように間接的な表現を使用することにより、教育的配慮がなされたものになっていると言えるのではないだろうか。さらに、本文の説明中や例文中のgenderを表す表現使用にも変化が見られる。例えば、両版の以下の3)と4)の記述を比較してみよう。

- 3) For example, if a man has said ‘I can come’, you might report this as ‘He said that he could come’. (CCEG2: 221) (下線筆者)
- 4) For example, if your friend has said *I can come*, you might report this as He said that he could come. (CCEG3: 272) (下線筆者)

3)のCCEG2で用いられていた *a man* は、4)のCCEG3では *your friend* に変更された。そして、同箇所において、*your friend* を受ける代名詞は、*He* のままである。一方、5)のCCEG2の本文説明中の *the hero* は、6)のCCEG3の記述では *a character* に変更され、同箇所において、*a character* を受ける代名詞は、*he* から *she* に変更された。

- 5) For example, if the hero of a story is thinking that he will see a girl called Jane the next day, . . . (CCEG2: 221) (下線筆者)
- 6) For example, if a character in a story is thinking that she will see a girl called Jane the next day, . . . (CCEG3: 273) (下線筆者)

これは、社会の変化を反映したものであるのは言うまでもないが、男性、女性を表す代名詞をそれぞれ適宜用いているのも編集時になされた配慮であろう。その他、本文説明中に一貫して見られる文法使用の変更点として興味深いものは、CCEG2で用いられていた限定用法の関係代名詞 *which* が、CCEG3では、*that* に置き換えられている。つまり、CCEG2とCCEG3の説明文中に使用されている英語を比較してみても、現代英語における変化が反映されていることが分かる。アメリカ英語とイギリス英語両方において、関係代名詞 *which* の頻度が下がり、関係代名詞 *that* の頻度が上がっていることについては、Leech et al. (2009) に詳しい。さらに、CCEG2とCCEG3を比較して、CCEG3では、アメリカ英語についての記述が増加している。詳しくは後の章で見てゆくことにする。

2. CCEG3には、過去20年以上にわたって収集された言語データに基づいて、書き言葉と話し言葉の分析結果が記述されている。CCEG2とCCEG3を比較して、現代英語の文法の使用と変化を見てみよう。

2.1. CCEG3 (p. x)には、‘New developments in language’ の例として以下の4つが挙げられている。現代英語の文法の変化をつかむことができる。

- (i) the use of the progressive with so-called stative verbs (e.g. *I'm loving every minute of it*)
- (ii) the use of *much* in affirmative unmodified statements (e.g. *There was much debate*)
- (iii) the spread of generic pronouns (e.g. *You get some people who are very difficult*)
- (iv) the use of *like* in reporting structures (e.g. *And I was like, 'wow!'*)

(i)は、状態動詞がとる構造についてのものである。以下は、CCEG3 (pp. 219-220) の記述に基づく。状態動詞は、通例、進行形をとらないとされるが、いくつか

の状態動詞が、特にインフォーマルな話し言葉で、時々、現在／過去進行形で使用されるようになってきている。どのような場合に用いられるかについては、CCEG3に、‘when you want to emphasize that a state is new or temporary, or when you want to focus on the present moment’ と述べられている。しかしながら、同時に、CCEG3は、‘Some people think this usage is incorrect, and it is usually avoided in formal texts’ と述べ、この用法は、フォーマルな語法では、通例、避けられているとの情報を与えている。CCEG3では、進行形を通例とらない状態動詞とみなされてきたが、時々、現在／過去進行形をとる動詞のリストを新たに設け、*forget*, *guess*, *imagine*, *lack*, *like*, *love*, *remember*, *want* を挙げている。さらに、CCEG3は、状態動詞の中には、インフォーマル、フォーマル両方の状況で、現在／過去完了進行形とともに用いられるものもあるとの情報を新たに付け加え、7) - 9) のような例文を掲載している。

7) *I've been wanting to speak to you about this for some time.*

8) *John has been keeping birds for about three years now.*

9) *Then she heard it. The sound she had been hearing in her head for weeks.*

(ii)は、*much* の肯定文中での使用についてである。以下は、CCEG3 (pp. 65-66) の記述に基づく。*Much* は通例、疑問文や否定文で用いられる。*Much* は、*too*, *so*, *as* のような副詞に修飾される場合に、10) - 11) のように肯定文で用いられる。

10) *It would take too much time.*

11) *Provide as much information as you can about the property.*

よりフォーマルな英語では、*much* が副詞に修飾されることなく、肯定文で用いられる。この用法は、*much* が、特に ‘discussion’、‘debate’ や ‘research’ に関係する抽象名詞とともに用いられる場合によく起こる。

(iii)は、‘generic pronouns’ (一般の人を表す代名詞) の *you*, *they* の使用が広がっ

ていることについてである。Geoffrey Leech氏は、‘generic pronouns’の使用の広がり理由のひとつに、受動態の使用頻度の低下を挙げている。³⁾ *They*の使用頻度が上がるのは、現代英語において、不定代名詞の*everyone*、*everybody*、*someone*、*somebody*などや、「決定詞(*any*, *each*, *every*)+名詞(句)」が、*they*で受けられる傾向にあることも理由として考えられるだろう。

(iv)は、伝達構造中での*be like*の使用についてである。*CCEG3* (pp. 336-337)によると、この用法は、インフォーマルな話し言葉に見られる。他の伝達動詞と異なる点は、代名詞*it*の後ろにも用いられ、例えば、12)のような場合は、実際には、誰も、‘Oh wow!’と言ったり思ったりしなくてもよく、むしろ、何かしらの状況についての情報を与え、‘*It was amazing/surprising*’のような意味を表す。

12) *It was like, Oh wow!*

2.2. 次に、現代英語の文法を調査するために、*CCEG3*の3種類の見出し(‘BE CAREFUL’、‘BE CREATIVE’と‘USAGE NOTE’)が付いた3タイプのパラグラフ、そして2種類のシンボル(‘The U.S. flag’と‘The speech bubble’)が付いた2タイプのパラグラフの記述を*CCEG2*の記述と比較する。*CCEG3* (p. xi)によると、BE CAREFULは、人々がしばしば問題を抱える特定の文法項目についての記述である。BE CREATIVEは、多くの語に適応できる規則についてのものである。USAGE NOTEは、個々の語句に適応される重要な規則であって、文法規則に一般化はできないものについての記述である。The U.S. flagは、典型的なアメリカ英語について、The speech bubbleは話し言葉によく見られる構造についての情報を与えてくれる。前者の3タイプはそれぞれ、*CCEG2*の‘WARNING’、‘PRODUCTIVE FEATURE’、‘USAGE NOTE’に相当する。以下、それぞれのタイプのパラグラフをBE CAREFULやThe U.S. flagのように、見出しやシンボル名で呼ぶことにする。後者の2タイプThe U.S. flagとThe speech bubbleは、*CCEG3*で新たに設けられたシンボル付きパラグラフであるが、記述の中には、*CCEG2*ですでに掲載されているものもある。*CCEG3*におけるそれぞれの項目数は、BE CAREFULは35、BE

CREATIVEは20、USAGE NOTEは94、The U.S. flagは43、The speech bubbleは31である。⁴⁾

本稿では、*CCEG2*と*CCEG3*を比較して、記述に変化があるものを中心に見ていく。*CCEG3*で新たに取り入れられた文法項目の中には、「…かどうか」を意味する接続詞*if*に導かれる節が、前置詞の後ろに、あるいは主語として用いられることはないことが述べられた項目(p. 389, BE CAREFUL)や、懸垂分詞構文(e.g. *Going to school, it started to rain*)に注意を促す項目(p. 390, BE CAREFUL)や、動詞*try*の後ろに*to*不定詞か動名詞のどちらをとるかによって意味の違いが生じることに関する項目(p. 200, USAGE NOTE)などがある。これらは、日本人高校生や大学生にはなじみのある項目であろう。これらは、英語の新たな変化を記述したのではなく、学習者に役立つ記述が付け加えられた例と言えよう。

*CCEG3*で変化が見られる、あるいは新たに付け加えられた記述の例を挙げてみよう。

a) 句動詞と目的語について (BE CAREFUL、The speech bubble)

CCEG2: It is not possible to have indirect objects with phrasal verbs. The only objects you can have are direct objects of the verb and objects of prepositions. (p. 170)

CCEG3: In standard written English it is not possible to have indirect objects with phrasal verbs. The only objects you can have are direct objects of the verb and objects of prepositions. In informal spoken English, however, a few phrasal verbs do have both a direct and an indirect object. In such cases, the indirect object is placed between the verb and the particle, and the direct object follows.

Would you break me off a piece of chocolate, please?

We brought her back some special cookies from Germany. (p. 182) (波線筆者。以下同様)

CCEG2では、間接目的語を句動詞とともに用いることはできないと記述されていたが、CCEG3において、波線部のように、標準書き言葉とインフォーマルな話し言葉の違いについての記述が新たに加えられた。標準書き言葉では、間接目的語を句動詞とともに用いることはできないが、インフォーマルな話し言葉では、句動詞によって、間接目的語と直接目的語の両方をとるものもあり、その場合、間接目的語を動詞と不変化詞の間に用い、直接目的語を不変化詞の後ろに用いる。

b) 代名詞 *it* と *she* について (USAGE NOTE)

CCEG2: Although 'it' is used as both a subject pronoun and an object pronoun to refer to something that is not male or female, 'she' and 'her' are often used to refer to ships, cars, and countries. (p. 31)

CCEG3: Although *it* is used as a pronoun to refer to something that is not male or female, *she* is sometimes used to refer to ships, cars, and countries. Some people do not like this usage. (p. 32)

船、車、国に女性を表す代名詞を用いる用法についての記述である。CCEG2では、波線部のように、この用法は「しばしば」用いられるとあったが、CCEG3では、「時々」用いられるのように記述が変更され、かつ、「この用法を好まない人もいる」との記述が新たに入れられた。

c) 分離不定詞について (USAGE NOTE)

CCEG2: Some people do put adverbs between the 'to' and the infinitive, but this use is not considered correct by some speakers of English. (p. 284)

CCEG3: Some people . . . particularly when they are speaking, do put adverbs between the *to* and the infinitive. This use is considered to be incorrect by some speakers of English.

My wife told me to probably expect you, he said.

Vauxhall are attempting to really break into the market.

Sometimes, however, if you avoid putting the adverb between the *to* and the infinitive, you change the emphasis of the sentence, or it can sound clumsy. In such cases, *splitting the infinitive*, as it is called, is now generally considered acceptable.

Participants will be encouraged to actively participate in the workshop.

I want you to really enjoy yourself.

Note that the second example above means *I want you to enjoy yourself very much*. If you said *I really want you to enjoy yourself*, you would mean *It is very important for me that you enjoy yourself*. (p. 301)

CCEG3では、波線部の記述が新たに付け加えられた。「特に話し言葉において」のような場面についての情報は、学習者が分離不定詞を用いる際に気をつけることとして役に立つだろう。さらに、新たに入れられた記述から、分離不定詞を正しくないとみなす人もいるが、「*to*と不定詞の間に副詞を用いるのを避けようとして、文の強調が変わったり、ぎこちなく聞こえるような場合に、今では一般に分離不定詞が容認されている」ことが分かる。そして、*I want you to really enjoy yourself*と*I really want you to enjoy yourself*の意味の違いについての記述が加えられたことも、学習者の理解を助けるであろう。

d) *ought to*の否定形について (The U.S. flag)

CCEG3で、以下の記述が新たに付け加えられた。

CCEG3: In American English, the *to* of *ought to* is optional in negative statements.

New organizations ought not treat them so poorly. (American) (p. 270)

アメリカ英語では、*ought to*の否定形が、*ought not to*ではなく、*ought not*のようになり、*to*が用いられないことがある。

e) 招待における *you have to . . .* と *you must . . .* について (The U.S. flag)

CCEG2: If you want to make an invitation in a very persuasive way, you can use a declarative sentence beginning with 'you' and 'must' .

You must join us for drinks this evening.

You must come and visit me.

You only use 'must' like this with people who you know well. (p. 231)

CCEG3: If you want to make an invitation in a very persuasive way, you can use a declarative sentence beginning with *you* and *must* or *have to*. *Have to* is more common in American English.

You must join us for drinks this evening.

You have to come and visit me.

You only use *must* and *have to* like this with people who you know well. (p. 285)

CCEG3で、波線部の記述が加わった。よく知っている相手に対して、強く招待をする場合に、CCEG2では、*you must . . .* のみを掲載していたが、CCEG3では、*you must . . .* に加えて、*you have to . . .* が新たに入れられるとともに、アメリカ英語では、*you have to . . .* のほうがよく用いられるとの記述が付け加えられた。

Leech et al. (2009: 114-116)、Smith & Leech (2013: 75-84)によると、20世紀のアメリカ英語、イギリス英語において、助動詞 *must* の頻度は下がり、*have to* の頻度は上がっており、特にアメリカ英語の話し言葉において、*have to* の頻度の上昇は顕著である。助動詞 *must* の頻度が下がっている理由として、権威的な調子を避ける 'democratization' などの社会的要因が挙げられている (Leech et al. 2009: 114)。

f) *who* と *whom* について (The speech bubble)

CCEG3で、以下の記述が新たに付け加えられた。

CCEG3: In informal spoken English, *who* is sometimes used after a preposition.

So you report to who?

This use is especially common when you leave out part of the question.

'They were saying horrible things.' – 'Really? To who?'

'It could be difficult.' – 'For who?' (p. 250)

インフォーマルな話し言葉では、前置詞の後ろに *whom* ではなく *who* が、時々用いられることが分かる。

g) 丁寧な依頼と *just* について (The speech bubble)

CCEG3で、以下の記述が新たに付け加えられた。

CCEG3: In spoken English, you can make a request more polite by adding *just* after the subject of the verb.

Could you just come into my office for a minute? (p. 283)

インフォーマルな話し言葉で、主語の後ろに *just* を用いることにより、より丁寧な依頼ができることがわかる。

BE CREATIVEの項目に関しては、両版にほとんど記述の変化が見られないため、ここでは例を挙げていない。ある語(句)の使用の変化が広がってゆき、広範囲の語(句)に一般化できるまでには、かなりの年月がかかるであろうことを考えると、CCEG2とCCEG3の記述の間にほとんど変化がないことも理解できる。

2.3. CCEG3では、The U.S. flagのシンボルの付いたパラグラフも設けられ、新たにアメリカ英語に関する記述が多く取り入れられた。各項目を見てみると、新たに加えられた記述は、英語の文法の変化についてのものというよりも、その多くが、すでに確立されているアメリカ英語とイギリス英語の違いについてのものであることが分かる。アメリカ英語に関する記述を多く取り入れた理由の一つとして、世界中のより幅広い学習者への教育的配慮が考えられるだろう。現在、英国出版社が出版する英語

学習者のための辞典や文法書が、アメリカ英語についての記述を、より積極的に取り入れる傾向にあるように思われる。

CCEG3のThe U.S. flagの43項目と、アメリカ出版社によるMerriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary (2008) (以下MWALED) の記述を比較した。CCEG3は文法書であり、MWALEDは辞典であるので、その性質は当然異なるが、どちらも上級学習者を対象としているため、比較を試みた。The U.S. flagの43項目のほとんどについて、MWALEDにも、類似する記述が見られるが、ここでは、次の2項目に触れておこう。

h) *whether*に導かれる節中の *be* 動詞の形について (The U.S. flag)

CCEG3: When the verb in a *whether*-clause is *be*, the **subjunctive** is sometimes used. When you use the subjunctive, you use the **base form** of a verb rather than the third person singular. This is considered rather formal in British English, but is common in American English.

Always report such behaviour to the nearest person in authority, whether it be a school teacher or a policeman, or anyone else. (p. 370)

CCEG3には、*whether*に導かれる節中で*be*動詞が用いられる場合に、仮定法現在の形が用いられ、原形が使用されることがアメリカ英語ではよくあるとある。MWALEDの*whether*のエントリー中の例文には、仮定法現在が用いられて、*be*が使用されたものは掲載されておらず、*whether*に導かれる節中の動詞の形に関する注記も掲載されていない。

i) 年齢を表す表現 について (The U.S. flag)

CCEG3: a compound noun referring to a group of people whose age is more or less than a particular number, which consists of *over* or *under* followed by the plural form of the particular number.

The over-sixties do not want to be turned out of their homes.

Schooling for under-fives should be expanded.

This construction is not common in American English. (p. 134)

CCEG3において、波線部のアメリカ英語についての記述が入れられた。「60歳を超えた人々」、「5歳以下の人々」を表す *over-sixties* や *under-fives* のような表現はアメリカ英語ではあまり用いられないことに関する注記は、MWALEDには見られない。アメリカ英語で使用頻度が低いために、MWALEDには掲載されていないとも言えよう。

3. 結論

CCEG3で新たに加えられた記述は、英語の文法の変化を反映したものもあるが、むしろ、確立した文法、語法についての記述を学習者への配慮で入れたものも多く見られる。第2章で見たように、英語文法の変化が映し出された項目の中には、Leech et al. (2009)やArts et al. (2013)などの、コーパスに基づく現代英語文法の変化についての研究で明らかにされているものと一致する項目も見られる。CCEG3は、主に上級英語学習者や教員を対象としているが、同書の記述から、日本の英語教育における文法指導項目についてのヒントを得ることも今後の課題としたい。

Notes

- 1) CCEG2とCCEG3はいずれも、使用している文法用語のリストをGlossary of grammatical termsとして掲載している。例えば、CCEG3では、*you* や*they*を指して、新たに 'generic pronoun' が用いられるようになった (CCEG2では、用語ではなく、*people in general*のような表現が用いられている)。CCEG2で使用されていた 'adjunct' は、CCEG3では使用されなくなっており、例えば、CCEG2の 'an adjunct of time' は、CCEG3では*a time expression*や*a time adverbial*のような表現が用いられている。
- 2) CCEGに掲載されている例文について、そして、それらの例文をどのように利用するかについては、John Sinclairによって書かれたNote on Examples (CCEG2: xii-xiii)が興味深い。
- 3) Geoffrey Leech (personal communication, 11 March 2013) .
- 4) 例えば、CCEG3 (p. 254)のように、1つのパラグラフにThe U.S. flagとThe speech bubbleについての記述が一緒になされているような場合があるため、各タイプの項目数は、パラグラフの前に付けられている、それぞれのタイプを表す見出しとシンボルの数を数えてある。CCEG3巻末のReference Section中の項目も数えている。

References

- Arts, B. et al. (eds.). 2013. *The Verb Phrase in English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hands, P. (ed.). 2011. *Collins COBUILD English Grammar*. 3rd ed. Glasgow: HarperCollins Publishers. (CCEG3)
- Leech, G. et al. 2009. *Change in Contemporary English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sinclair, J. (ed.). 1990. *Collins COBUILD English Grammar*. London: Collins ELT.
- Sinclair, J. (ed.). 2005. *Collins COBUILD English Grammar*. 2nd ed. Glasgow: HarperCollins Publishers. (CCEG2)
- Smith, N. and Leech, G. 2013. 'Verb Structures in Twentieth-century British English'. In B. Arts et al. (eds.). *The Verb Phrase in English*, 68-98. Cambridge: Cambridge University Press.
- Collins COBUILD English Language Dictionary*. 1987. London: Collins ELT.
- Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary*. 2008. Springfield, MA: Merriam-Webster, Inc. (MWALED)
- Language. 2013. Collins. Available at <http://www.collinslanguage.com/content-solutions/wordbanks> (accessed 23 April 2013).